

3 グスクを考える

■グスク論争

高橋 そろそろグスクを取り上げたいと思います。いわゆるグスク論争で私が理解しているのは、グスクの原初形態は集落・共同体の聖地があつて、その中から聖域を含んだ有力者の居城が出てくるとするのが定説化しているように感じていますが、そこはどうですか？

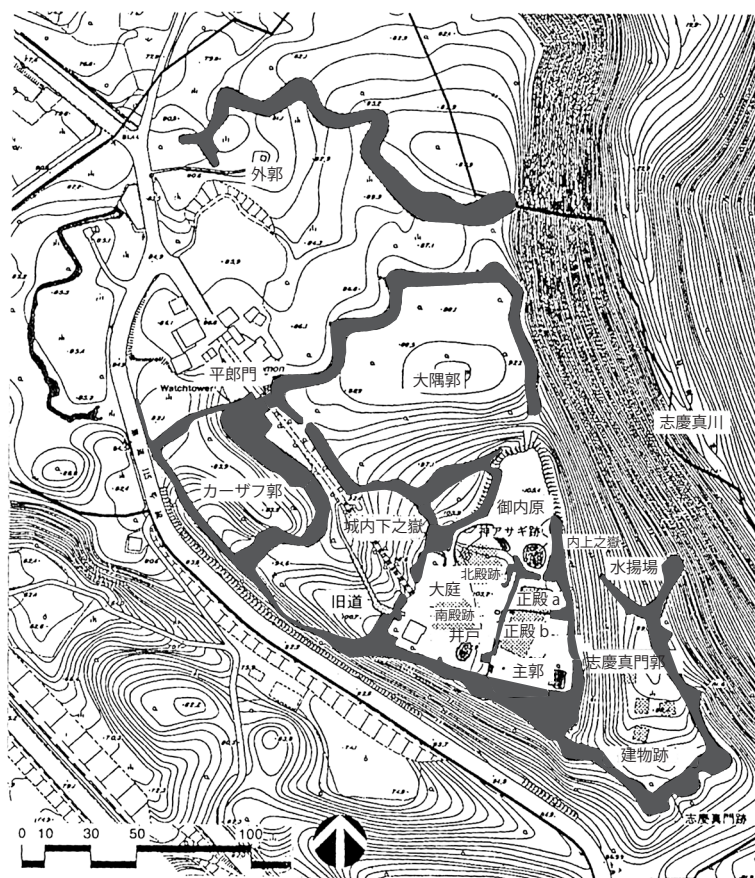
池田 グスクとは何かというのは、伊波普猷先生も含めた言語学者が「グ」は敬称で、「スク」は要塞の「塞」の字で、囲まれた場所を指す意味合いがあるから居城説が出てくるのです。その後、仲松弥秀先生がグスクとはもともと墓があつた場所を取り囲む形で成立していくのだから、根源的なものは墓を含めた聖地だという説を提示します。そこに葛元政秀先生がグスクの中には名も知れず石垣がめぐっているものもあつて、それはもともと集落であつて、集落の中から特定の家族が住むところの按司の居城・グスクになつていくと唱えるのです。

小野 グが付かないでスク・シユクなどもあつて、根つこの意味だと言われているね。先島では集落遺跡に「——スク」とつく例がありますね。

池田 そうですね。グスク論争の当初は、語源とグスクのオリジナルは何だという議論でしたが、高良倉吉先生がグスク・モデルを作り、時間の経過の中でグスクも変わっていくだろうから、いろいろなものが付与されて、複合的な要素をもつのだという説を出されるのです。

一九七二年に沖縄が復帰した後、大規模グスクが国指定になるとき、整備に向けた発掘調査が進み、今帰仁グスクの場合、遡つても十三世紀後半、十四世紀前半から構造化が始まることがわかりました。そうすると、集落から構造化したグスクへの転換が十四世紀代に位置づけられるとすれば、グスク時代はいつから始まるのかという議論になるのです。それまでグスク時代には、農耕が始まつて、グスクを作る社会となり、琉球王国につながる段階までを考えたので、農耕とグスクの始まりを同時並行で考えていたのです。

しかし、ここにズレが出てきたので、安里進さんが農業



復元平郎門(内側から)▶

今帰仁グスク平面図(金武正紀「考古学からみる今帰仁城跡の歴史」『グスク文化を考える』新人物往来社、2004 所収図を改変)

生産の始まる原グスク時代と政治的な社会のグスク時代に
分けようと提唱します。となると、グスクの研究は支配者
の居城になっていくプロセスに議論が集中します。では、
支配者の居城としてのグスクの成立過程は、どのように展
開していくのか。嵩元先生が言うように支配者の居城とは
思えないグスクもたくさん存在するわけで、本当にグスク
は支配者の居城だけなのかという議論になって、またまた
混沌としてきます。現在の研究では、グスクの発展段階論
と集落の成長過程を組み合わせて説明しようとしているの
ですが、なかなかうまくいかない。

—— グスクの構造化とは何でしょう？

池田 石垣で囲まれた中に基壇建物(正殿)があつて、何ら
かの儀礼をするような空間ができればというのを考えて
います。

■多様なグスクのあり方

高橋 大規模グスクの中でも切石を使った石垣のある巨大
な今帰仁や浦添、勝連がありますね。グスクがこうした形
になるのは、時期的にはいつ頃ですか？



今帰仁グスク大隅郭の復元された石垣

池田 大規模グスクの構成要素である石垣と基壇建物(正
殿)が登場するのは、十四世紀前半から中頃です。粗製白
磁(ビロースクタイプと今帰仁タイプ)の分析によると、今帰
仁では丘の上に人が柵列をもつて住み始めるのが十三世紀
後半、まわりに石垣をめぐらし、翼廊付きの基壇建物がで
きるのは十三世紀末―十四世紀初頭で、グスクの構造が整
うのは十四世紀中頃くらいと考えています。

沖繩本島南部の琉
球石灰岩がある地域
では石垣に切石を使
いますが、今帰仁グ
スクは岩盤の上にあ
るから切石ではなく
岩盤の割石を野面積
みにしています。今
帰仁の石は横長に採
れるので、虎口の部
分などに横積みして
いますが、ただ単に